秋田駅西口

芝生の広場

AKITA STATION WEST GATE LAWN SQUARE

Opened in August 2020.

AKITA STATION WEST GATE LAWN SQUARE

Opened in August 2020.

秋田駅西口

芝生の広場

人が主役のまちへ

秋田の玄関口、街のど真ん中に仰向けに寝転がると、青く広がる空が駅前ビル群の稜線に切り取られていた。都市の喧騒がBGMとなり、あまり体験したことのない爽快感を味わえた時間だった。

令和元年から改修工事に着手していたJR秋田駅西口駅前広場南側の車寄せと芝生広場が完成し、令和２年８月１日から供用を開始した。この改修の最大トピックは、平面駐車場という機能を取りやめて、それを市民の誰もが利用できる芝生の広場へと改修したことである。この地に鉄道駅が整備されて以来ずっと、駅前は交通広場という「都市施設」として機能し、一部を平面駐車場として利用してきたが、平成29年に完成した駅直結の５階建て立体駐車場にその役割をバトンタッチすることになった。今回の駅前広場整備で最も重要なポイントは、特定の目的を持たない市民が居心地よく過ごせるオープンスペースを駅前という街の中心に整備したことにある。床はゴロンと寝転がっても肌触りがフカフカの洋芝が張られ、保存されたケヤキ並木が木陰をつくる広場西側には、様々な高さと大きさの家具が配置され、ランチや休憩やおしゃべりなどの日常生活の多様な活動（アクティビティー）へと誘う空間が用意されている。利用者が自由にたたずみ、ふるまえる、そんな広場である。秋田市とJRが共同で、駐車場という単一機能の「施設」から、人（歩行者）が憩い過ごすための、「人が主役」のオープンスペースへと転換する先駆的な試みとして、秋田の駅前空間が生まれ変わった。

近代的思想から続く20世紀までの都市計画や街づくりは、場所を目的化することでその機能性を高めてきたが、徐々に場所（＝空間）とその目的（そこで行われるサービス）が標準化され、その弊害として、その都市、その街らしさといったものはどんどん影を潜めていくことになった。また、街が目的化された既知な空間で埋めつくされるに従って、何とも言えない窮屈さと閉塞感が漂う、退屈でつまらないものとなってしまう。おそらく昔は「することが無いから行く」のが街であったはずなのに、現状では、目的の無い人は街に行かないし、そういう人を街も受け入れることができなくなりつつあるが、目的や機能を持たないこの芝生の駅前広場はこの状況を変えていく第一歩となるだろう。

この場所をどう使うかは市民に委ねられてはいるが、使い方の上手、下手は関係ない。それぞれのやり方で、日常の中の少しの時間をここで過ごす、ということからで、先ずは十分なのではないか。小さな活動の集積が未来の街の姿へと繋がり、その風景の重なりが、その都市らしい景観となるだろう。

小杉 栄次郎
秋田公立美術大学景観デザイン専攻教授

秋田駅西口 芝生の広場
AKITA STATION WEST GATE LAWN SQUARE
【発行】秋田県秋田市建設部道路建設課
所在地：秋田市山王一丁目１番１号本庁舎４階
TEL：018-888-5749
【編集】株式会社協和コンサルタンツ

秋田市長　穂積 志

秋田駅西口駅前広場（南側区域）の整備が完了し、令和２年８月１日に一般公開を迎えることができました。関係者の皆様におかれましては、本事業にご尽力いただき心より感謝申し上げます。

現在、秋田駅周辺では再開発の動きが加速度的に進んでおり、「ノーザンゲートスクエア秋田」をはじめ、ＡＢＳ秋田放送新社屋や多世代共生型ＣＣＲＣマンションが建設され、駅前商業地の地価が２年連続で上昇するなど、賑わいの機運が一層高まってきております。これもひとえに、ＪＲ東日本様、県、本市による官民一体の取組の成果であり、この西口駅前広場も、必ずやその追い風となってくれるものと期待しているところです。また、令和３年３月には、旧県立美術館を活用した「秋田市文化創造館」の開館や都市計画道路「千秋久保田町線」の開通も予定されており、中心市街地の更なる活性化に繋がるものと確信しております。

この秋田駅西口駅前広場は、県都の玄関口として、空間そのものの在り方が大きな意味を持つものであり、今回の改修整備によって、緑あふれる美しい広場に生まれ変わりました。今後は、誰もがくつろげる憩いの空間であるとともに、多くの賑わいを創出する空間として、市民・県民の皆様はもとより、県外から来ていただいた方々にも、秋田の魅力を感じていただける場となることを願っております。

秋田駅前広場の変遷

交通から人のための広場へ

緑の「芝生の広場」を目にして、まちの顔、駅前の印象が変わったと感じた方も多いのではないでしょうか。これを機会に、簡単に秋田駅前広場の歴史を辿ってみます。

秋田駅は明治35年（1902年）開業、明治38年（1905年）の奥羽線全線開通時に本駅舎が現在より南（現立体駐車場付近）に設置されました。昭和６年には駅前から大町まで路面電車が開設し、広小路に向けて軌道が敷設（同15年撤去、26年再設置）されました。(図-1)

次に駅前広場が様変わりしたのは昭和36年（1961年）。10月の国体開催を前に「秋田民衆駅」が完成し、駅前広場も区画整理により拡張されました。バス乗降場、タクシー・自家用車の駐車場も整備され、現在の駅前の原型ができています。(図-2)

その後、路面電車は昭和41年（1966年）３月に廃止され、バス乗降場が現在の形となります。平成９年には秋田新幹線開通に合わせ駅舎等がリニューアルされましたが、広場の機能は大きく変わっていません。

こうして振り返ると、駅前広場はその時代の交通手段にあわせて姿を変えてきたと言えます。とすれば「芝生の広場」ができたことは何を象徴するのでしょうか？これからはまちなかに「人」のための空間が求められ、公共交通が見直される時代になるのかもしれません。

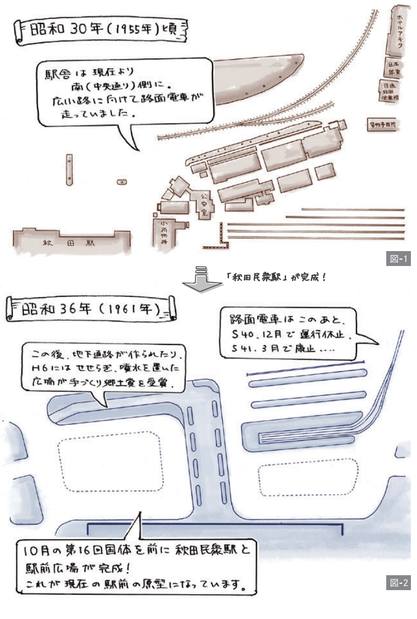
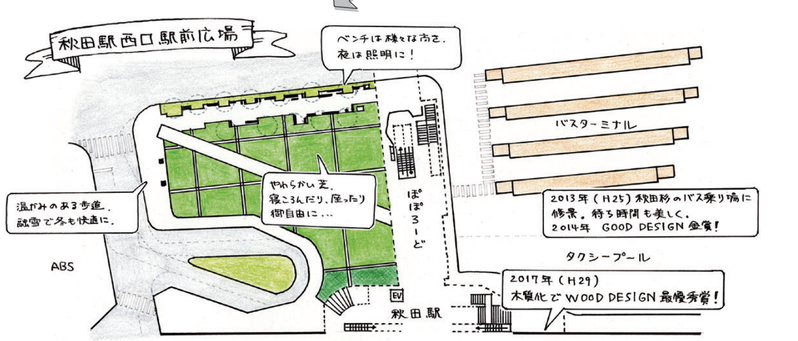


図-1

図-2



AKITA STATION WEST GATE LAWN SQUARE

芝生の広場のいろいろ

❶ 芝生

採用したのは、西洋芝のケンタッキーブルーグラスです。ケンタッキーブルーグラスは、西洋芝の中でも耐陰性に優れ、半日陰の条件下でも密度が落ちにくい品種です。サッカー場やゴルフ場などのスポーツターフ用（業務用）にも採用され、踏圧に強く、緻密で高品質のターフを形成しますので、芝生に直接触れた際には、ふわっとしたやわらかい肌触りを感じることができます。葉色は淡い明緑色で、葉幅は細く、法面緑化や都市景観の形成に適しています。

❷ ベンチ

ベンチの使用材料は国産材（今回は秋田県産杉材）を使用し、長期間シロアリや腐朽の被害を防ぐ処理を施した、高耐久性木材です。その優れた耐久性は、公的機関による野外耐久性試験において「現在29年経過しても良好」と証明されています。また、寸法安定剤を注入することにより、処理材の割れ抑制効果が大きく木材の含水率が変動しても薬剤処理した初期状態を保つ効果が期待できます。

❸ ケヤキ並木

西側に位置する12本のケヤキの木は、既存のものをそのまま活かした設計です。およそ50年前から秋田駅前の変遷を見守っています。

❹ 舗装材

高級感を出すために600×300mmという大型のインターロッキングブロックを採用しました。融雪施設の熱伝導率を上げるためカーボンが混合されています。色調は芝生の緑に映え、温かみを感じさせるイエローベージュ系の色調となっています。

❺ ロータリー

安全性を確保するため回転半径を大きくし、スムーズに走行出来るように整備しました。またロータリー内は本州から九州の山間部に広く見られる国産のササ類を植栽しました。

❻ 夜間照明計画

ベンチ下にライン状のLED照明を配置。温かみのある暖色系の色合いの光源を採用しました。広場を横切る斜めの歩道には、埋め込み式のフットライト、ロータリー内の車道照明については、JIS規格に基づき、安全な照度を確保した照明灯を整備しました。

Lighting Plan

❼ 融雪施設

フロンガスが注入されたヒートパイプ方式から電熱線方式の融雪施設へ変更しました。新融雪施設は、トータルコストに優れ、故障したとしても、故障箇所を容易に把握することができるため、施設停止につながるリスクが低くなっています。送迎車のロータリー周りを中心に歩行者の利便性を考慮して設置しています。

❽ ブロンズ像《団欒の群像》

元秋田大学教授の彫刻家、阿部米蔵による作品。昭和36年、民衆駅（旧秋田駅）開業時に秋田ライオンズクラブ創立を記念して設置され、秋田市に寄贈されたブロンズ像です。秋田ライオンズクラブ創立60周年を記念し台座と共に修復され、新しく改修された秋田駅西口の広場に位置を少し動かして設置されました。

事業概要

◉所在地　秋田県秋田市中通七丁目地内

◉整備規模
［整備面積］約4600㎡(内 芝生の広場部分 約2200㎡)
［融雪施設範囲］約900㎡
［主な施設］一般車両乗降場、融雪歩道、芝生広場、ベンチ、景観照明施設、給排水設備

◉設計概要
［平成30年７月～平成31年３月］基本計画・基本設計
［平成30年９月～平成31年１月］秋田駅西口駅前広場改修事業検討委員会開催(全３回)
［令和元年５月～令和元年８月］実施設計
［設計者］株式会社協和コンサルタンツ

◉工事概要
［工事名］市道中通本線道路改良工事(本体工事)
［工事期間］令和元年９月～令和２年５月
［施工者］むつみ造園土木株式会社
［工事名］市道中通本線融雪施設改良工事(融雪施設改良工事)
［工事期間］令和２年１月～令和２年７月
［施工者］羽後電設工業株式会社